

0.1 H28 数学 A

[1] (1) $|x| \leq \frac{1}{2}$ なら $5 - 1/(1+x)^2 > 0$ である. よって $0 < \int_0^x 5 - 1/(1+t)^2 dt = 5x + 1/(1+x) - 1$ である. よって $0 < \int_0^x 5t + 1/(1+t) - 1 dt = 5x^2/2 + \log(1+x) - x$ である. よって $-5x^2/2 < \log(1+x) - x$ である. また $5 + 1/(1+x)^2 > 0$ である. よって $0 < \int_0^x 5 + 1/(1+t)^2 dt = 5x - 1/(1+x) + 1$ である. よって $0 < \int_0^x 5t - 1/(1+t) + 1 dt = 5x^2/2 - \log(1+x) + x$ である. よって $5x^2/2 > \log(1+x) - x$ である. すなわち $|\log(1+x) - x| < 5x^2/2$ である.

(2) $\sum a_k$ が収束するから, ある $N \in \mathbb{N}$ が存在して, $n \geq N$ ならば, $a_n < 1/2$ である. 無限積の収束性は $k = N$ からの無限積の収束性と同じ. また (1) より $|\log(1+x)| \leq Cx^2 + x$ である. \log の連続性から

$$\log \lim_{n \rightarrow \infty} \prod_{k=N}^n (1+a_k) = \lim_{n \rightarrow \infty} \log \prod_{k=N}^n (1+a_k) = \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=N}^n \log(1+a_k)$$

である.

絶対級数 $\sum |\log(1+a_k)|$ の収束性を考える.

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=N}^n |\log(1+a_k)| \leq \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=N}^n Ca_k^2 + a_k = C \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=N}^n a_k^2 + \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=N}^n a_k$$

右辺は収束するから, $\sum \log(1+a_k)$ は絶対収束する. よって収束するので, $\lim_{n \rightarrow \infty} \prod_{k=N}^n (1+a_k)$ は収束する.

(3) $\sum_{k=1}^{\infty} \frac{(-1)^k}{3k+1}$ と $\sum_{k=1}^{\infty} \left(\frac{(-1)^k}{3k+1} \right)^2$ の収束を示せばよい. $S_n = \sum_{k=1}^n \frac{(-1)^k}{3k+1}$ とする. $S_{2n} = \sum_{k=1}^n \left(\frac{1}{3(2k-1)+1} - \frac{1}{3(2k)+1} \right)$ であり, $\frac{1}{3(2k-1)+1} - \frac{1}{3(2k)+1} > 0$ より S_{2n} は単調増加する. 同様に $S_{2n+1} = 1/4 - \sum_{k=1}^n \left(\frac{1}{3(2k)+1} - \frac{1}{3(2k+1)+1} \right)$ であり, $\frac{1}{3(2k)+1} - \frac{1}{3(2k+1)+1} > 0$ より S_{2n+1} は単調減少する. $S_{2n+1} - S_{2n} = 1/(3(2n+1)+1)$ であり, $\lim_{n \rightarrow \infty} S_{2n+1} - S_{2n} = 0$ である. また $S_{2n+1} = 1/(3(2n+1)+1) + S_n > 0$ より S_{2n+1} は有界な単調数列であるから収束する. したがって S_{2n} も収束して $\lim_{n \rightarrow \infty} S_{2n} = \lim_{n \rightarrow \infty} S_{2n+1}$ である. よって $\sum_{k=1}^{\infty} \frac{(-1)^k}{3k+1}$ は収束する.

$\sum_{k=1}^{\infty} \left(\frac{(-1)^k}{3k+1} \right)^2 = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{(3k+1)^2} < \frac{1}{9} \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{k^2} < \infty$ である. とともに収束するから無限積も収束する.

[2] (1) $y \in f_A(W^\perp)$ を任意にとる. ある $x \in W^\perp$ が存在して $y = f_A(x)$ である. 任意の $u \in W$ について $(u, y) = {}^t u A x = {}^t ({}^t A u) x = ({}^t A u, x) = (f_A(u), x) = 0$ である. よって $y \in W^\perp$ である.

A の固有値 $\lambda \in \mathbb{C}$ と固有ベクトル $v \in \mathbb{C}^n \setminus \{0\}$ をとる. $x, y \in \mathbb{C}^n$ について標準エルミート内積 $(x, y) = {}^t x \bar{y}$ を定める. $\lambda(v, v) = (Av, v) = (v, {}^t \bar{A} v) = (v, \bar{\lambda} v) = \bar{\lambda}(v, v)$ である. $(v, v) > 0$ より $\lambda = \bar{\lambda}$ である. よって $\lambda \in \mathbb{R}$ である.

(2) A の固有空間全ての直和を W とする. $\mathbb{R}^n = W \oplus W^\perp$ である. $f_A(W) \subset W$ となるから, $f_A|_{W^\perp}: W^\perp \rightarrow W^\perp$ を得る. \mathbb{C} による定数倍を加えることで \mathbb{R}^n を \mathbb{C} 上線形空間 \mathbb{C}^n に拡張する. W, W^\perp も同様に $\overline{W}, \overline{W^\perp}$ に拡張する. $f_A|_{W^\perp}$ は $\overline{W^\perp}$ 上の線形変換に拡張できる. $W^\perp \neq \{0\}$ なら $f_A|_{\overline{W^\perp}}$ の固有値 λ と固有ベクトル $v \neq 0$ をとれる. $u = 0 + v \in \overline{W} \oplus \overline{W^\perp}$ とする. $Au = \lambda u$ である. λ は f_A の固有値であるから $\lambda \in \mathbb{R}$ である. よって $u \in \mathbb{R}^n$ としてよい. $u \in W^\perp$ となるがこれは W の定義に矛盾. よって $W^\perp = \{0\}$.

f_A の固有値 λ と固有ベクトル x について $\text{Span}\{x\} = \text{Span}\{x\}^{\perp\perp}$ であり, 任意の $y \in \text{Span}\{x\}^\perp$ について $(y, {}^t A x) = (A y, x) = 0$ より ${}^t A x \in \text{Span}\{x\}$ である. よって ${}^t A x = \mu x$ とできる. $\lambda(x, x) = (A x, x) = (x, {}^t A x) = (x, \mu x) = \mu(x, x)$ である. $(x, x) > 0$ より $\lambda = \mu$ である.

\mathbb{R}^n の任意の元 x は固有ベクトル v_1, \dots, v_n の線形結合で表せる. $x = \sum_{i=1}^n a_i v_i$ とする. $A x = \sum_{i=1}^n a_i A v_i = \sum_{i=1}^n a_i \lambda_i v_i = {}^t A x$ である. よって $A = {}^t A$ である.

[3] (1) 任意の $x, y \in [0, 1]^\infty$ に対して $|x_k - y_k| \leq 1$ である. よって $\sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k} |x_k - y_k| \leq \sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k} = 1$ である. よって d は $[0, 1]^\infty \times [0, 1]^\infty$ から \mathbb{R} への写像である.

$x = y$ なら $d(x, y) = 0$ である。また $d(x, y) = 0$ なら $\sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k}|x_k - y_k| = 0$ であるから $x_k = y_k$ である。よって $d(x, y) = 0$ なら $x = y$ である。 $d(x, y) = d(y, x)$ は明らか。

x, y, z について $\sum_{k=1}^n 2^{-k}|x_k - z_k| \leq \sum_{k=1}^n 2^{-k}|x_k - y_k| + \sum_{k=1}^n 2^{-k}|y_k - z_k|$ である。 $n \rightarrow \infty$ とすると $\sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k}|x_k - z_k| \leq \sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k}|x_k - y_k| + \sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k}|y_k - z_k|$ である。 よって $d(x, z) \leq d(x, y) + d(y, z)$ である。 よって d は距離。

(2) $x_n \rightarrow a$ とする。 $d(x_n, a) = \sum_{k=1}^{\infty} 2^{-k}|x_{n,k} - a_k| \geq 2^{-i}|x_{n,i} - a_i| \rightarrow 0$ ($n \rightarrow \infty$) である。 よって任意の k に対して $x_{n,k} \rightarrow a_k$ 。

任意の k に対して $x_{n,k} \rightarrow a_k$ とする。 任意の ε に対して $2^{1-n_0} \leq \varepsilon$ なる n_0 が存在する。 このとき $\sum_{k=n_0}^{\infty} 2^{-k}|x_{n,k} - a_k| \leq 2^{1-n_0} \leq \varepsilon$ である。 1 から $n_0 - 1$ までの整数 k について、ある N_k が存在して $n \geq N_k$ なら $|x_{n,k} - a_k| \leq \varepsilon$ である。 $N = \max\{N_1, \dots, N_{n_0-1}\}$ とする。 このとき $\sum_{k=1}^{n_0-1} 2^{-k}|x_{n,k} - a_k| \leq \sum_{k=1}^{n_0-1} 2^{-k}\varepsilon \leq 2\varepsilon$ である。 よって $n \geq N$ なら $d(x_n, a) \leq 3\varepsilon$ であるから $x_n \rightarrow a$ である。

(3) $\{x_{n,k}\}_{k=1}^{\infty}$ は有界閉区間 $[0, 1]$ 内の点列であるから、収束部分列を必ずもつ。 したがって収束部分列 $\{x_{n,k_j^{(n)}}\}_{j=1}^{\infty}$ に対して数列 $\{x_{n+1,k_j^{(n)}}\}_{j=1}^{\infty}$ も収束部分列 $\{x_{n+1,k_j^{(n+1)}}\}_{j=1}^{\infty}$ を持つ。 このとき $\{k_j^{(n+1)}\}_{j=1}^{\infty}$ は $\{k_j^{(n)}\}_{j=1}^{\infty}$ の部分列である。 これが任意の n について成り立つから数列 $\{k_j^{(1)}\}_{j=1}^{\infty}, \{k_j^{(2)}\}_{j=1}^{\infty}, \dots$ を得て、それぞれ前の数列の部分列となっている。 数列 $\{s_n\}_{n=1}^{\infty}$ を $s_n = k_n^{(n)}$ で定める。 $\{s_n\}_{n=1}^{\infty}$ は全ての m について $n > m$ では $\{k_j^{(m)}\}_{j=1}^{\infty}$ の部分列となっている。 したがって $\{x_{s_n,k}\}_{n=1}^{\infty}$ は収束列になっている。 よって $\{x_{s_n}\}_{n=1}^{\infty}$ は収束列である。

□ (1) $z = re^{i\theta}$ とする。

$$\begin{aligned} \int_{C_r} \frac{e^{iz}}{z} dz &= \int_0^\pi \frac{e^{ire^{i\theta}} ire^{i\theta}}{re^{i\theta}} d\theta = \int_0^\pi ie^{ire^{i\theta}} d\theta = \int_0^\pi ie^{ir \cos \theta} e^{-r \sin \theta} d\theta \\ \int_{C_r} \left| \frac{e^{iz}}{z} \right| dz &= \int_0^\pi |e^{-r \sin \theta}| d\theta \leq \int_0^\pi d\theta = \pi \end{aligned}$$

である。 よってルベークの収束定理から

$$\lim_{r \rightarrow 0} \int_{C_r} \frac{e^{iz}}{z} dz = \int_0^\pi i d\theta = \pi i, \quad \lim_{r \rightarrow \infty} \left| \int_{C_r} \frac{e^{iz}}{z} dz \right| \leq \lim_{r \rightarrow \infty} \int_0^\pi |e^{-r \sin \theta}| d\theta = \int_0^\pi 0 d\theta = 0$$

(2)

$r > \varepsilon > 0$ に対して $z = \varepsilon$ から $z = r$ までの積分経路を $\Gamma_{\varepsilon,r}^+$ とする。 $z = -r$ から $z = -\varepsilon$ までの積分経路を $\Gamma_{\varepsilon,r}^-$ とする。

$$\begin{aligned} \int_{\Gamma_{\varepsilon,r}^+} \frac{e^{iz}}{z} dz &= \int_\varepsilon^r \frac{e^{ix}}{x} dx = \int_\varepsilon^r \frac{\cos x + i \sin x}{x} dx \\ \int_{\Gamma_{\varepsilon,r}^-} \frac{e^{iz}}{z} dz &= \int_{-r}^{-\varepsilon} \frac{e^{ix}}{x} dx = \int_r^\varepsilon -\frac{\cos x - i \sin x}{-x} dx = \int_\varepsilon^r \frac{-\cos x + i \sin x}{x} dx \end{aligned}$$

である。 積分経路 $\Gamma_{\varepsilon,r}^+, C_r, \Gamma_{\varepsilon,r}^-, -C_\varepsilon$ によってできる閉曲線 Γ を考えると、被積分関数は原点を除いて正則であるから、 $\int_\Gamma \frac{e^{iz}}{z} dz = 0$ である。 よって

$$\begin{aligned} 0 &= \int_{\Gamma_{\varepsilon,r}^+} \frac{e^{iz}}{z} dz + \int_{C_r} \frac{e^{iz}}{z} dz + \int_{\Gamma_{\varepsilon,r}^-} \frac{e^{iz}}{z} dz + \int_{-C_\varepsilon} \frac{e^{iz}}{z} dz \\ &= \int_\varepsilon^r \frac{\cos x + i \sin x}{x} dx + \int_\varepsilon^r \frac{-\cos x + i \sin x}{x} dx + I(r) - I(\varepsilon) \\ &= 2i \int_\varepsilon^r \frac{\sin x}{x} dx + I(r) - I(\varepsilon) \rightarrow 2i \int_0^\infty \frac{\sin x}{x} dx - \pi i \quad (r \rightarrow \infty) \end{aligned}$$

したがって $\int_0^\infty \frac{\sin x}{x} dx = \pi/2$ である。